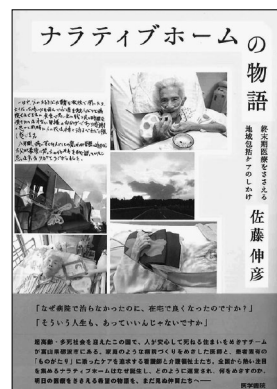


『ナラティブホームの物語』 限りある“いのち”の ものがたりを語り継ぐ

著：佐藤伸彦／定価：本体 1,800 円＋税
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



「死」を正面から見据えた生の医療が“看取りの医療”。治療ではなく人生の最後の時を悔いなく生き抜くための医療があってもいい。終末期で大切なのは一人の人間が歩んできた人生、つまりものがたられる「いのち」に向き合うこと。たとえ最先端の医療で「命」を救っても患者を救えないときがあると知った一人の医師が辿り着いた医療の形です。

かつて末期がんの治療は「敗北の医療」と言われていましたが、私はそうではないことを確信していました。なぜならまだ緩和ケアという概念も普及していない約 20 年前に私たち家族は医師と訪問看護師の支えを受けて末期がんの母を自宅で看取ることができたからです。ですが母亡き後、がん医療の取材を始めた私は先進国だと思っていた日本の医療の未熟さを目の当たりにすることになりました。当時「もう治療法がない」と医療から見放された患者さんがどれだけいたか……。

少しだけわが家のものがたりを。私が 18 歳の時にくも膜下出血で倒れ右半身麻痺と言語障害を抱えていた母に突き付けられた末期がんの宣告。さまざまな管が取り付けられ最後は寝たきりになりました。「こんな状態で生きていても意味がない」と思いかねない状況にもかかわらず、常に笑顔を絶やさず「感謝だわ」と言っていた母から“限りがあるから命は輝く”と教わりました。母のような状態を著者は「そこに在るだけでいい尊さ」と

表現しています。「何のために生かされているのか」ではなく「私たちに何を語りかけているのか」を問うべきではないかと。

終末期でよく使われる尊厳という言葉。「尊厳とは」の答えを佐藤先生は看護師さんたちから教わります。看護師さんたちが患者さんの家族と一緒につくり上げた“ナラティブアルバム”には、生まれた頃、仕事をする様子、奥様との出会いなど患者さんの“人生”が刻まれていました。私の唯一の後悔は母と一緒に思い出を振り返らなかったこと。“ものがたり”を共有してきた家族だからこそできることがあったと改めて気づかされました。最期のときを見守る人たちに語り継がれる“ものがたり”その過程のなかで初めて尊厳という言葉が血の通った意味をもつのです。

“家族の覚悟”が求められる在宅での看取り。看取りは息を引き取る瞬間だけに集約されるのではなく命の限りが分かったときからすでに始まっています。大切なのは“何処で”ではなく適切なサポートを途切れることなく受けられるかであり、覚悟を支え見守ってくれる“人”がいるかどうかだと思いますこの本は在宅に取り組もうというすべての人にとっての道標に、そして“ものがたり”の主人公である 1 人ひとりが最期までどう生きたいのかをイメージし語るきっかけになるに違いありません。